

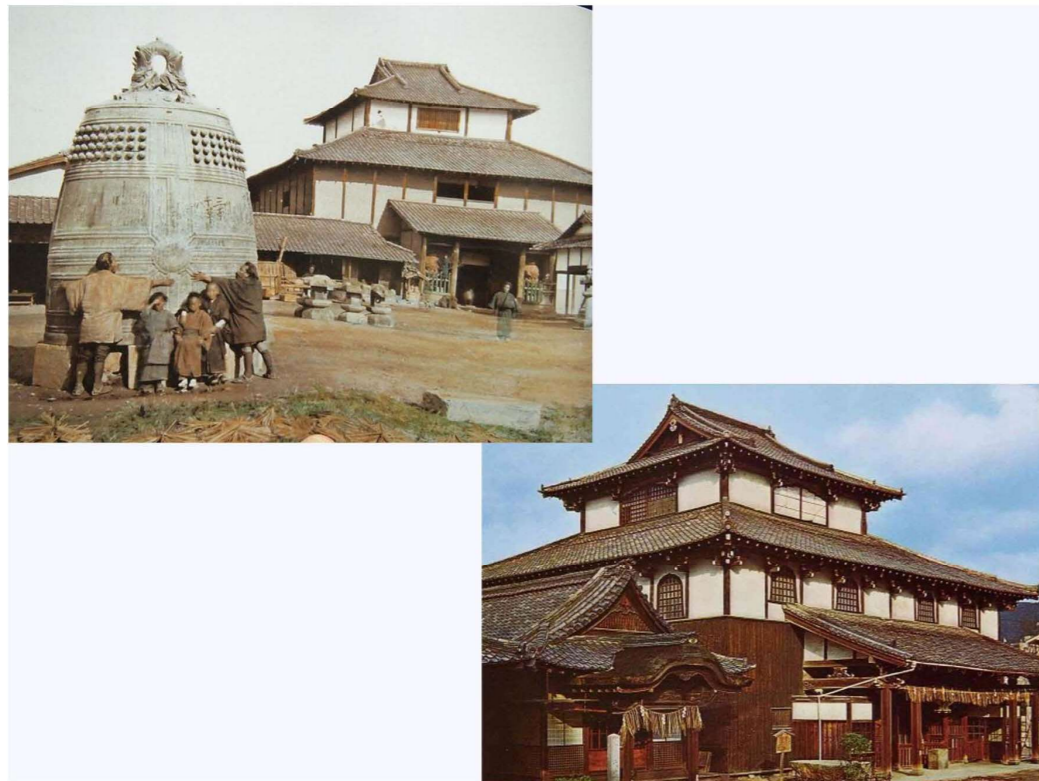
第7回 身近な京都を知る歴史散策（東山区）

東山を巡る①

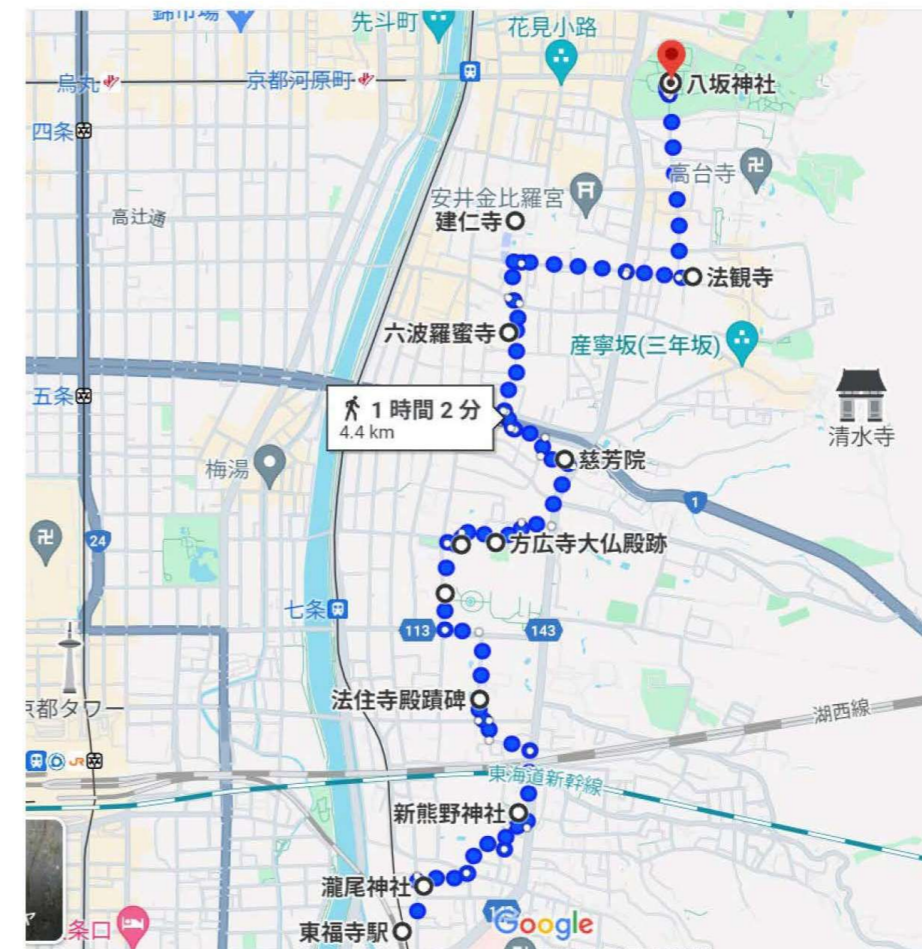
主催：特定非営利活動法人平安京調査会

<https://heiankyo-tyousakai.com>

特定非営利活動法人



- 散策コース
- 東福寺駅
 - 瀧尾神社
 - 新熊野神社
 - 法住寺殿蹟碑
 - 方広寺大仏殿跡
 - 慈芳院
 - 六波羅蜜寺
 - 建仁寺
 - 法観寺（八坂の塔）
 - 八坂神社



新春の龍、法住寺殿と方広寺

初めに

令和6年を迎え、散策シリーズも7回目となりました。今回は、辰年にちなんで龍の彫刻のある滝尾神社をスタートし、京都東山界隈の法住寺殿と方広寺を中心に六波羅あたりまでを散策します。この辺りは後白河法皇、源氏と平家、豊臣秀吉など歴史に名を遺す人物にかかわる史跡がたくさん残っているところです。平安時代から近世まで、多彩な歴史に触れてみましょう。

1. 瀧尾神社

創建年代は不詳ですが、平安時代には存在したと伝えられています。天正14年(1586)に豊臣秀吉の方広寺造営に伴い現在地に移転したと伝えられています。祭神は大国主命、弁財天、毘沙門天です。

拝殿の天井には、江戸時代後期の彫り物師九山新太郎が制作した全長8mに及ぶ龍の木彫が飾られています。あまりの精巧さに「夜な夜な龍が動き出して水を飲みに行く」と噂がたち、一時は金網がかけられていたそうです。



瀧尾神社 龍の彫物

2. 法住寺殿

法住寺殿は後白河上皇によって保元3年(1158)に院庁として造営を開始しました。平家の拠点六波羅と武力を後ろ盾にし、壮大な御所や御堂が建てられました。

京都市立東山泉小学校(旧一橋小学校)で行われた発掘調査では、法住寺殿に伴う建物の地業(地盤改良)が発見されています。



旧一橋小学校の発掘調査で発見された建物地業

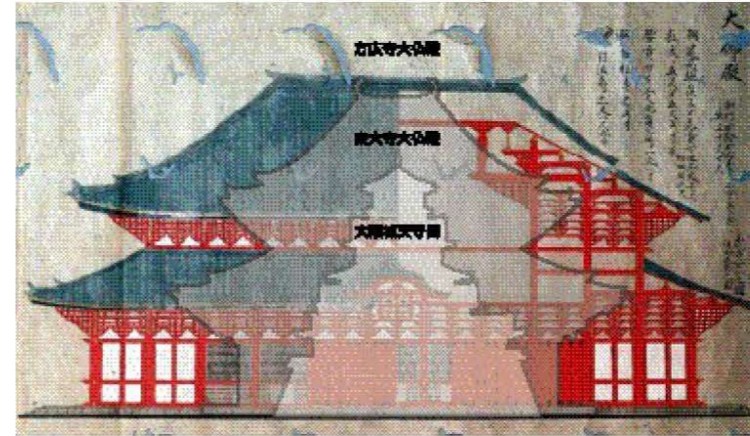


図2 方広寺大仏殿の図 大きさを比較するために加筆した
中井正知氏 所蔵

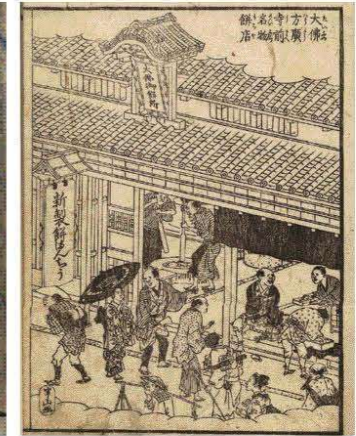


図3 名物大仏餅を売る店
『再撰 花洛名勝園會』元治元年刊

2000年夏、豊国神社の東隣で、大仏殿跡の調査を行ないました。調査地は、現在でも周囲より一段高く、この方形の高まりが大仏殿基壇に相当すると考えられています。

調査の結果、大仏殿の遺構を大変良好な状態で検出することができました。

まず、基壇上面の化粧石を検出しました。正方形の平らな花崗岩を基壇の方向に対して斜格子状に並べていますが、これは四半敷きといわれる方法です。石の表面が赤くなったり細かく砕けていることから、火災で火を受けたことがわかります。化粧石のない部分は、柱のあった場所です。礎石は残っていませんでしたが、大仏殿の巨大な建物を支えるために直径4mもの大きな穴を掘り、石を詰めるという基礎工事をしていました(写真1)。

基壇の南端を示す地覆石や、南中央にあった階段跡も検出しました。階段の踏み石は抜き取られていましたが、階段脇の石と地覆石はそのままの状態が残っていたた

め、基壇の高さは約1.8mであったことがわかりました(写真2)。

ところで東大寺をみると、大仏は大仏殿中央の一段高くなった台の上に座しています。調査ではこの大仏の台座も確認しました。台座は、外周に自然石を並べ、その内側に拳大の礫と土を盛って高まりをつくっています(写真3)。文献史料に、台座は径十八間(約34m)の八角形と記録されていることから、検出したのは、その南端の一辺であることがわかりました。また、台座付近で土が多く出土したため、上面は敷きであったと推定できます。

このような調査の結果で得た柱の間隔、基壇や階段の位置などから、基壇の位置や大仏殿の規模、92本あった柱の位置を確認することができました(図1)。文献史料や絵画史料を参考にすると、大仏殿の規模は、南北四十五間二尺七寸(約88m)・東西二十七間六尺三寸(約54m)・高さ二十五間(約49m)で、ここに高さ六丈三尺(約19m)の大仏が安置されていたのです(図2)。

秀吉は天正十四年(1586)に、奈良東大寺にならって大仏建立を欲し、方広寺の創建を開始しました。実際には金銅の大仏を見ることなく秀吉は没し、その遺志を受け継いだ息子秀頼が大仏を完成させたのは慶長十七年(1612)。実に造営開始から26年の歳月が流れていました。まもなく豊臣家は滅亡してしましますが、京の大仏は「太閤さんのつくった大仏」として長く人々に親しまれ、大仏殿は東山の麓にその雄姿を見せていたことでしょう。

こうした大仏殿の具体的な様子が明らかになり、これまでの調査とあわせて方広寺の伽藍配置を復元することができました。

なお、大仏殿跡の遺構は地下に保存され、調査地点は緑地公園となっています。(近藤 知子)



方広寺の位置

京の大仏さん —方広寺大仏殿跡の調査—

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

大仏といえば奈良東大寺のものが有名ですが、京都にも豊臣秀吉が創建した方広寺に大仏が安置されていました。

江戸時代の洛中洛外図などを見ると、大仏殿は三十三間堂の隣に堂々と描かれています。また、門前には大仏餅を売の店があり、大勢の人で賑わっていたようすがうかがわれます(図3)。

その大仏殿は寛政十年(1798)に焼失し、その後同じ様な規模の建物や大仏が再建されることはありませんでした。しかし、現在でも方広寺の巨大な石垣や、梵鐘などが残っています。

1998年の京都国立博物館内の発掘調査では、南門跡・回廊跡や石垣などを検出し、方広寺境内のようすが少しずつわかってきました(リーフレット京都No.135)。

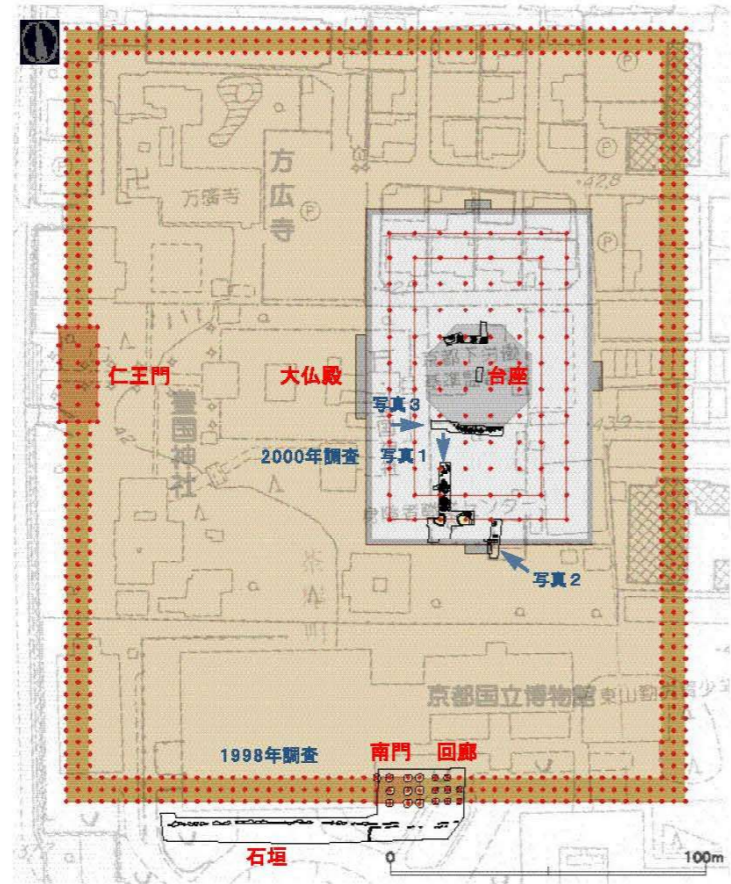


図1 方広寺伽藍復元図と調査区概略図



写真1 基壇上面の四半敷きと礎石据付跡



写真2 南面階段と基壇地覆石



写真3 大仏台座の石組み

新熊野神社 法住寺殿の鎮守社として永暦元年(1160)に熊野三山の熊野権現を勧進して造営されました。応仁の乱以降荒廃していましたが、江戸時代に後水尾天皇の中宮東福門院によって再興されました。現在の本殿は聖護院宮道寛法親王(後水尾天皇の子)によって寛文13年(1673)に再建されました。



新熊野神社

蓮華王院(三十三間堂) 法住寺殿の鎮守寺、蓮華王院の本堂が三十三間堂です。平清盛が造進して長寛2年(1165)に完成、その後焼失しましたが文永元年(1266)に再建されました。桁行35間(118.2m 身舎33間)に及ぶ長大な堂内には、1001軀の千手観音像が安置されています。



三十三間堂で見つかった地業

2016年に堂の北側で行われた発掘調査で、こぶし大の石と土を交互に積み上げた丁寧な地業(地盤改良)の跡が見つかっています。

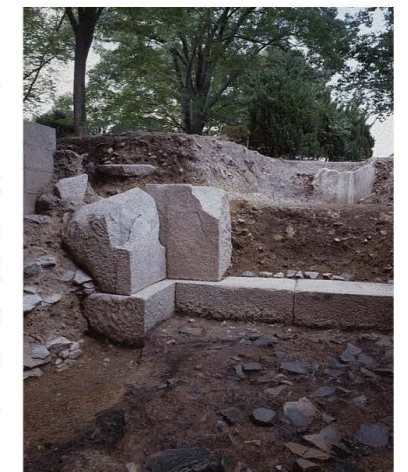
法住寺 平安時代中期、藤原為光によって創建され、院政期にこの寺を中心に法住寺殿が営まれました。法住寺殿が木曾義仲によって焼き討ちされ、その後、後白河法皇も崩御されると、後白河法皇の御陵を守る寺として存続し、明治時代に御陵と寺が分離して現在に至っています。今様の復興にも尽力されています。



法住寺

3. 方広寺

豊臣秀吉が発願した大仏を安置するための寺として文禄4年(1595)に創建、規模は奈良の大仏を上回るものでした。その後、慶長の大地震(1596年)で内部の大仏が崩壊、その後秀頼が金銅製の仏像を建立しようとして建物ともに焼失。そして再建した方広寺は梵鐘に「国家安康」銘が入っていたことがきっかけで豊臣家滅亡の引き金となりました(方広寺梵鐘銘事件)。豊臣家滅亡の後大仏殿は健在でしたが寛政10年(1798)に落雷によって焼失しました。その後、民間人により再建されました。大仏殿跡の一部は豊国神社の東側で公園となっています。近年の発掘調査によって大仏の台座や大仏殿の基壇が見つかっています。



発掘調査で見つかった大仏殿基壇

南大門と太閤塀 南大門は方広寺造営の周辺整備に伴って、蓮華王院の南側に設けられた門です。切妻造本瓦葺き、三間一戸の八脚門で、虹梁の刻銘から豊臣秀頼が慶長5年（1600）に建立したものと推測されています。門に接続する塀は「太閤塀」と呼ばれ、同じく方広寺の造営に伴って整備されたものです。軒丸瓦は豊臣家の家紋である桐紋となっています。



方広寺南大門と太閤塀

方広寺石塁 京都国立博物館や豊国神社の西側には巨大な石材を使った石垣があります。これは方広寺の造成に伴って築かれたもので、天下統一を果たした秀吉の権威を示すものです。発掘調査によって石材の奥行きは狭いことが明らかとなっており、見かけを重視した構造のようです。



方広寺石塁

豊国神社 神号「豊国大明神」を下賜された秀吉を祀る神社です。豊臣家の滅亡とともに徳川家康の命により廃絶となりましたが、明治天皇の勅命によって再建されました。敷地の大部分は方広寺の寺領でしたが、明治政府により公収され、豊国神社の境内となりました。参道の石畳は方広寺大仏殿の四半敷を利用したものです。

4, 慈芳院（薬師石仏）

慈芳院は慶長3年（1598）近江国蒲生郡橋本の領主、山中長俊が妻慈芳院の追善供養のために建立した寺院と伝えられています。長俊は豊臣家の近臣で方広寺大仏殿建立に尽くした人物と伝えられています。

慈芳院には等身大の薬師如来石仏が安置されています。花崗岩製で高さ1.8m、蓮華座に座し、舟形光背を背負って厚肉彫にされた薬師如来です。鎌倉時代中期のもので



慈芳院薬師石仏

5, 鳥辺野

ノーガホテル建設に伴って発掘調査が行われ、平安時代後期の墓跡が見つかりました。平安京の墓域である鳥辺野の実態が明らかとなったのはこの調査が初めてです。ここでは笠塔婆（かさとうば）とよばれる供養塔の断片が出土しています。また、清盛の時代の武家屋敷の区切る掘も調査で見つかり遺構の一部はホテル内に移築保存されています。

6, 六波羅蜜寺

創建は平安時代中期に活躍した市の聖、空也が造した道場に由来し、空也の死後「六波羅蜜寺」と改称して天台宗の寺院となりました。平安時代後期には平家とのつながりで反映しましたが、平家の没落とともに衰退しました。その後、源頼朝や足利義詮によって再興され、豊臣秀吉による方広寺の造営に際しては、真言宗智積院の末寺となりました。

境内地には鎌倉時代の阿弥陀石仏や古墳の石棺を台座にした大型宝塔があります。、「都七福神」の一つでもあります。



六波羅蜜寺の宝篋印塔と宝塔

7, 六道珍皇寺

臨済宗建仁寺派の寺院で弘法大師の師、慶俊僧都、あるいは小野篁の創建といわれています。小野篁の像がまつられ境内にある井戸は篁が六道の辻から冥土に通うのに使ったという伝説があります。

境内地の一角には100体を超える石仏群が並べられています。室町時代から江戸時代のもので、鳥辺野に集まる先祖供養のために創立された石仏群と思われます。



六道珍皇寺の石仏群

8, 建仁寺

臨済宗建仁寺派の大本山寺院で、栄西が鎌倉幕府2代将軍源頼家の援助を得て建立されました。法堂には平成14年に創建800年を記念して天井に小泉淳作による「双龍図」が描かれています。



建仁寺

9, 八坂法観寺

臨済宗建仁寺派の寺院です。伝承によれば聖徳太子の夢告によって建立されたといわれていますが、朝鮮系渡来氏族である八坂氏の氏寺とする説が有力です。現在の五重塔は室町時代の再建ですが、発掘調査によって飛鳥時代の基壇の上に建てられていることが明らかとなりました。



法観寺五重塔